



# 母語は思考の基盤、生きる力

—子どもの表現力を高める NPO マナビエルの挑戦—

2018年11月の平成30年度第2回日本語検定で東京書籍賞優秀賞を団体で受賞された特定非営利活動法人マナビエル。代表の志田千帆さん、川田博美さん、松田美紀さん、田中奈緒さん、杉浦美緒さんにお集まりいただき、代表の志田さんにお話を伺いました。

## マナビエル設立の経緯について

マナビエルは昨年2018年4月に設立されていますが、設立の経緯について教えてくださいませんか。

志田) マナビエルは、「自分らしい表現と出会い、相互作用で深まる学びが多様性のある社会を創る」を理念に、昨年2018年4月に設立しました。スタッフは、私も含めて子育てをしている女性を中心となって活動しています。私たちマナビエルが目指しているのは、言葉で表現することに苦手意識を持つ子供たちの個別性、つまり「自分らしい視点」を育て、書くことをとおして表現することを好きになってもらうことです。

まず、現代の日本の子どもたちの置かれている状況をお話したいと思います。核家族等による家族構成の変化やインターネット環境の普及にともない、人と人が直接言葉を交わす機会が著しく減りました。その影響から、現代の子どもたちには「言葉で想いを伝える体験」が不足し、自己表現に苦手意識を抱えたまま大人に成長してしまう可能性が高くなっています。

一方、中・高・大学受験では、推薦入試枠の拡大によって小論文が重視されています。また、記述を求める傾向も高まっています。それは、児童・生徒の自己表現力を重視している表れだといえます。

子どもたちの現状と入試で要求される水準とのギャップは、2020年施行の新学習指導要領を見ても、ますます広がる可能性があります。このことから子どもたちの「言葉の使い手」としての能力の低下が憂慮されているのです。言葉で表現する力が足りていないということは、学びや気づきを自ら表現し、次に活かすことができていないからです。私たちは、言葉で表現することに苦手意識を持っている子供たちの「自分らしい視点」を育て、書くことを好きになってもらいたいと強く思っています。

実は、私自身もまた大人になって仕事に就いてから、言葉で伝えることの難しさを痛感した一人です。やはり、大人になってから学ぶのは、なかなか大変なことです。だからこそ子供のうちから出来れば、その子の可能性は、ますます広がると考えているのです。

## マナビエルの「表現力を高める」活動について

子どもたちに書くことを好きになってもらいたいということですが、具体的にはどのような活動をされているのですか。

志田) マナビエルでは、キッズ文章表現教室「空色ことば」の運営、オンライン・出張授業を通して、作文や小論文の文章添削を行っています。

私自身も3人の子の母なのですが、我が子の授業参観に行くと、作文を手のひらで必死に隠そうとしている子どもたちの姿を見かけます。本来、表現には正解も不正解もないはずですが、自信をもって見せることができない、自己肯定感の低さも感じられるのです。今の日本の学校には自由に発言できる場や空気感が、なかなかないことも一つの要因なのかもしれません。

ですからマナビエルは、評価や駄目出しをすることなく、子どもたちの「できた！」や「楽しい！」という想いを共有し保障するよう努めています。子供たちが「自分らしさ」を武器にチャレンジできる場でありたいのです。

マナビエルの指導者は「先生」とは呼びません。「いいね」「それもあるね」と生徒の表現を受けとめる役割となるサポーターでありたいからです。

表現することを「恥ずかしい」「苦手だ」と感じている子どもたちにまず必要なことは、「表現して楽しかった」という体験を積み上げることだと考えます。恥ずかしさを払拭し、自由にさらに自分なりの考えをもった表現ができるようになることは、後の知識を吸収しようとする意欲を高める原動力へと繋がるのではないのでしょうか。

また、マナビエルでは作文教室の他に、表現の場を作ることを目的とした「小学生取材班」による取材体験イベント「ボールキッズ取材班」に力を入れています。

地元の銀行・鉄道会社・飲食店・商店などとタイアップし、子どもがインタビュアーとなって働く大人を取材します。そして「取材」を体験したあと、そこでの気づきを文字に起こして、子ども同士で発表し合っています。この場を通して相互作用され、個々の表現の幅を広げることに影響を及ぼしていると言えるでしょう。

今後は、このような子どもたちに表現したくなる「体験」を提供するイベントを増やすと同時に、子供たちの発表をより多くの人に見てもらえるコンクールや企画展などの「場」を提供していきたいと考えています。





松田美紀さん 田中奈緒さん 志田千帆さん 松浦美緒さん 川田博美さん

### 「自分とは？」を言語化する力は、生きる力になる

自分のことを言葉でしっかり伝えることは社会人になれば、当然必要だと思いますが、そのような能力は、いざ社会人になる前に即席で身につくものではないと思いますが、いかがでしょうか。

志田) 自分の想いを表現することは、実はとても難しいことです。即席でそのような表現力を身に付けるのは無理だと思います。実際に就職活動では、エントリーシートに自分のやってきたこと、職場でやりたいことを書かなければなりません。マナビエルの活動メンバーにエントリーシートの添削を行っているキャリアカウンセラーがいるのですが、自分の想いをシートに表現できない大学生が多く、学生にとっても大きな課題になっています。

表現は一日では身につきません。自分を表現するには「自分で考え、文字に起こす」という小さい頃からの体験の積み重ねが欠かせないのです。大学生になっても小学生と同じような文章でしか表現できないとしたら、何ともったいないことでしょう。社会に出た後では、もったいないだけでは済まされないのではないかと思います。

2020年度から、小学校では3年生から外国語活動、5年生から英語が教科となりますが、志田代表はどのように思われますか。

志田) 小学校の英語教育の必須化に見られるように、今は言葉の学習というと、早期に外国語、特に英語を習得することばかりに目が向いているようです。しかし「外国語が話せること」と「自ら考え表現できること」は、まったく別のことです。母語は思考の基盤であり、人が物事をじっくり考えるのは母語でしかできないのです。

## 表現力を高めるのに最適な「日本語検定」

子どもたちの言葉の力を伸ばすことを目標しているマナビエルが、日本語検定を導入した経緯を教えてください。

志田) マナビエルがまず大切にしていることは、子どもが自由に表現できる空気感を創出することで、表現することの楽しさを実感し、体験を積み上げていくことです。

ですから、私たちは日本語検定を、表現を学ぶ子供達の「入り口」としてではなく、いろいろな表現を試した上で「吸収できる時期に受けるとよい検定試験」として位置付け、より表現力の向上に活用しています。

おかげさまで今回、当教室で受検した10名が全員合格しました。団体賞をいただき、とても光栄であるという想いととも、私たちの活動が間違っていなかったと改めて確信しました。

すべての教科の基礎に日本語力があると言われるますが、人が生きて行く上で必要な思考力、表現力、コミュニケーション力もまた日本語力の上に成り立っています。

子どもも大人も生きていれば苦しい思いをすることはあります。それは避けて通れないことですが、言葉で思考したり、意見を取り入れ咀嚼したりすることで、乗り越えていけるのです。

日本語を自由に使いこなす力は、人生の大きな後ろ盾になります。日本語検定で自分の日本語力を客観的に知ることは、人生を一步推し進める力になります。それと同時に、入試対策としての国語力を高めるきっかけになることにも繋がると私たちは考えます。



NPO 法人マナビエル

電話：03-6868-5661

メール：info@manabi-el.com

URL：https://manabi-el.com

